「三車火宅」の一門について

——法華経の成立地をさぐる、その一——

高橋　堯昭

私は幾度となくガンダーラからギルギットまで旅して来た、仏塔に彫りこまれた美しいギリシャ的な仏像を求めて。こうして歩くうち法華経の中に描かれている風土がこのパキスタン西北部の乾燥世界に非常に似かよっていることに気付いた。たしかに法華経の舞台は経文上は霊鷲山となっているが、モンスーン的沃地のものとは非常に異質のものが多数描き出されているように思われてならないからである。

このような視点に立って一九七九年七月から灼熱の荒野を丹念に調査して見た。これは十何回目かのパキスタン行きで、はじめてこの地に行った時から十七年の才月がたっていた。即ち十七年間の仏塔巡礼の成果である。

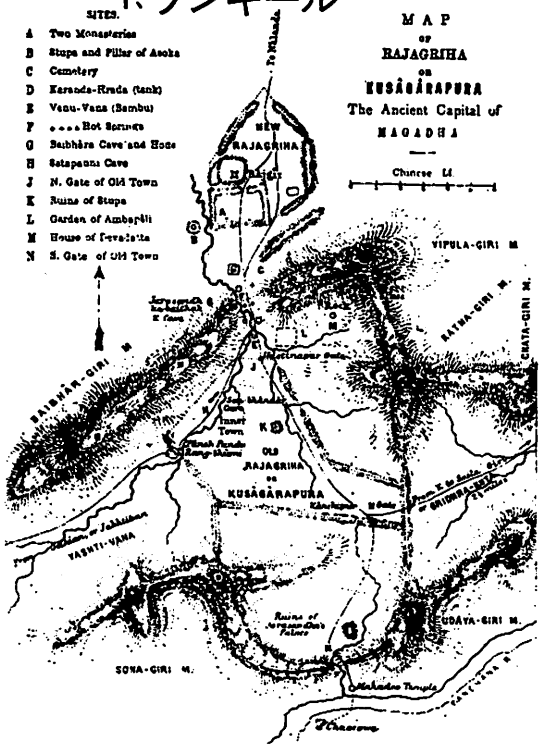
◈

まず興味をひかれるのは譬喩品の「三車火宅」の問題である。「国邑聚落に長者あらん、その年衰邁して財富無量なり。多く田宅及び諸々の僮僕あり、その家広大にして唯一門あり。諸々の人衆多くして一百・二百乃至五百人その中に止住せり」とある。これは「四門出遊」の仏伝[1]とは異った環境といえよう。インドのガンジス流域の大平原上

を飛ぶとき、眼下にひろがる大地に恰も網をひろげたように道路は四方八方に通じ、村落都市はその網の目の結び目として道が四方から出入りしている有様は誰しも興味をひくことである。然しその反面山岳地方特にガンダーラの山地は村々が一本の道路に沿って散在する。これは地形上やむを得ないことだが、興味深いことはその一本の道からほんの少し入った所に、恰も木の枝に葉がつくとき直接葉はつかず葉柄によって枝につくように本道から少し入った所、即ち支道によって村落都市が本道と連結していることである。然も土塀や城壁によってかこまれて。従って、ガンジス周辺の町は四方から道が流入しているのに対してガンダーラの町はペシャワル、チャルサダ、マルダン等の大きな町を除いてこの例は非常に少ない。これはあの山にかこまれた旧王舎城(写1)でさえ四つの方向に道が山合いから外に通じていたのに対して好対象をなしている。

更に「僧院」の問題、特に西北インド、タキシラからガンダーラまでの僧院の構造である。タキシラのモラモラドウやジャウリアン(写2)等の僧院の入口が一つであること。これらは律に従ってナーランダで

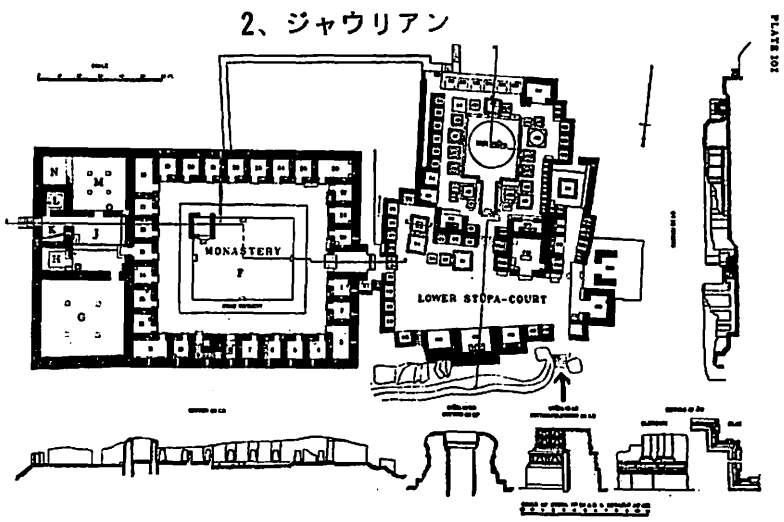
1、ラジギール



見られるようなインド本土伝統の建て方を継承している。西南インドの石窟寺院がその各窟に一つの出入口を持つ如くである。然し私が注意をうながしたいのは各僧院が一門をもつ構造だけでなく、塔や集会所、多くの僧院を含む全山のいろいろの建て物が一つの門によって外に連絡しているという閉ざされた構造をもつことである。有名なアショカ大塔の一つであるダルマラージカ大寺(写3)が川に面した所に一門をもち、まわりは壁にかこまれ、この寺と相対する山の中腹のカラワン寺も、又ガンダーラ地区のジャマールガリ(写4)やタフティバイも共に一門によってガードされているのは何故であろうか。

特にタフティバイの山寺が尾根尾根に散在する無数の僧院を有し、それが夫々外に通ずるということでなしに、唯一門から夫々の僧院に道が導かれていることが特徴的である。私は思う、これらはこの地方に伝えられた西アジヤ、特にペルシャの建築様式でこれが僧院や寺にまで影響を及ぼしたのではないかと。即ちマーシャルのタキシラ発掘報告や京大隊のガンダーラ調査報告等がこの問題に鍵を与えてくれる。即ち

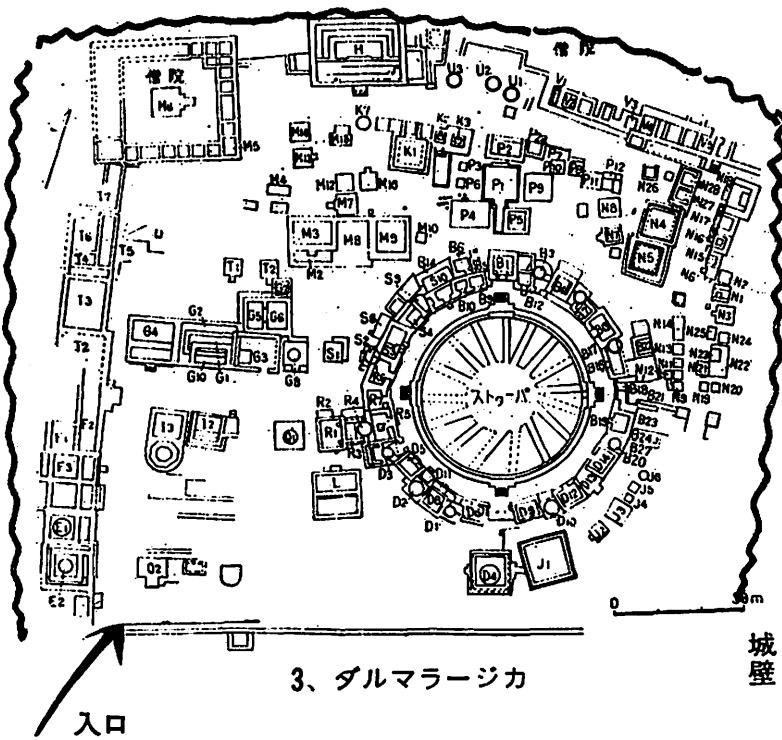
2、ジャウリアン



Plan, section and details of amphitheatre.

マーシャルのタキシラ[2]によればギリシャ人の町シルカップがまわりにぐるりと高い城壁でかこまれ一門によってガードされる構造をもち[3]アフガニスタンのジェララバードの町も全く同じ構造をもっていたことも確認されているから、タキシラからジェララバードまでの間にこの様式が行われていたことがわかる。

これらの建築様式は前述の如くもともとは西方のキャラバンサラエ（遊牧民や隊商がラクダとか羊を全部収容して宿泊出来る建物）の構造のもので、これがペルシャの石造建築と結びつきダリュース大王の都ペルセポリスを作り出すに至った。背後に山をひかえ前面にひろがる平地や沙漠を見下して一門で守備するこの建築様式が東へ伝わってガンダーラの地

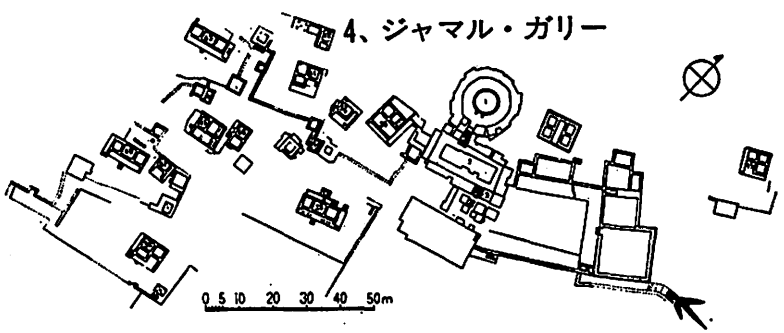


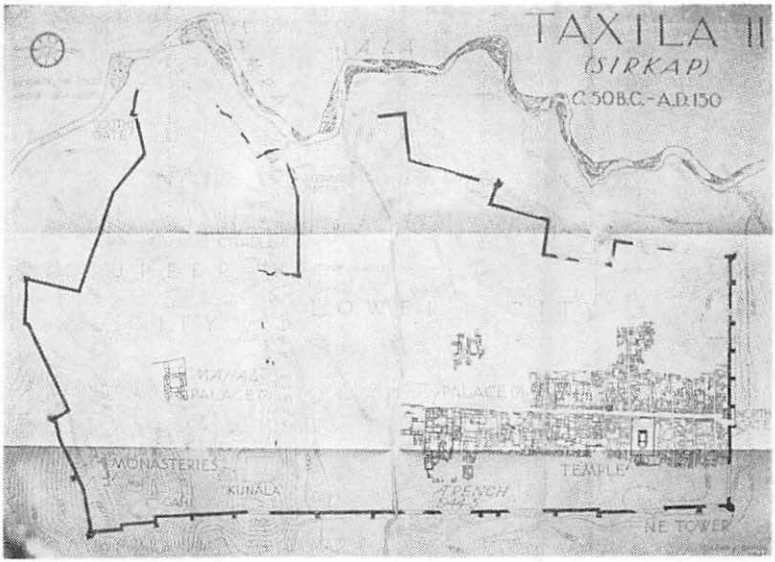
3、ダルマラージカ

で採用されるに至った。特にこの地は中央アジャからインドに入る唯一の道で異民族が相いついで流入する為、この城塞的建て方がとり入れられ、僧院までも防衛的見地からこの建て方がとり入れられて行った。そのよき例はダルマラージカの大寺に物見の塔が作られ、バマラの僧院では物見の塔ばかりでなく、窓も明り取りのように天井近くまで高く作られるような建て方に変って行った。このような状況では一門構造はごく自然のなり行きであったろう。

然して私は更にこの地方で「生きた化石」とも言うべき「一門構造の民家」が散在しているのを見て大いに意を強うした。それはカイバー峠に散在する部落及び家々がその一門の形式を残しているからである。異民族を毛嫌いする部落民の感情のため今迄不成功に終った家の内部への見学が今回思いがけず出来た、それは今回やとったガイドが幸い長者の息子と学友であったということから内部に入ることが出来たのだ。高さ四五米という泥の壁で家のまわりを延々三四百米とかこまれた長者の家。(写6) たった一つの門を入ると中は二つに分けられている。男の住む建物群と女の住む建物群とに中央のしきりで分けられている。現在回教徒の彼等は男女居を異にしている為だ。我々男性の入れる男のセクトには三四軒の立派な建物が建てられ広い庭にはラクダならぬトラックが数台おかれている。(写7)

4、ジャマル・ガリー





5、タキシラ

信解品第四の長者の家、「出入息利すること乃ち他国に徧し、商估賈客亦甚だ衆多なり」の表現そのままに、この家の主人もアフガニスタンからソ連、東はカルカッタまで交易したり、又他国の交易業者やトラック隊が連日立ちよるとか、まさに法華経表現の当時の状勢はこのようなものであったかと思われる状景である。

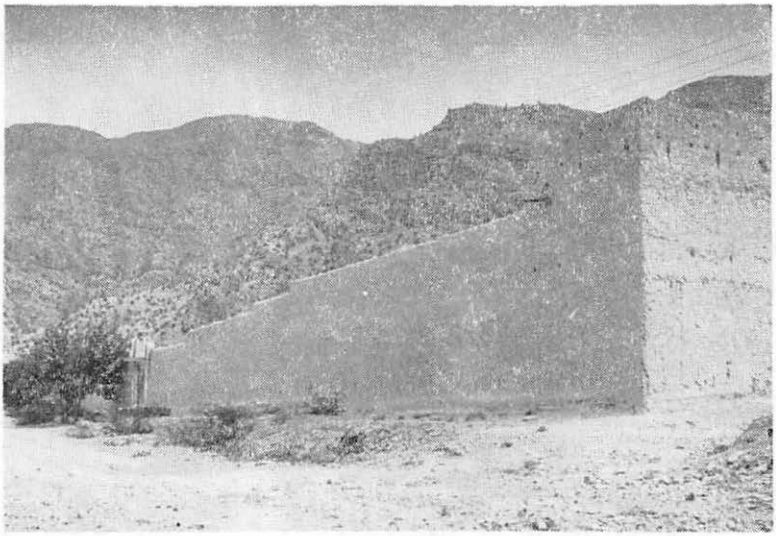
この家を辞して小高い岡に登る。そばに仏教のストゥーパが建っている。この丘から見渡すとこの部落の家々も大小の別はあっても夫々壁に囲まれた一門の構造をもっている。更にその家々の外にはぐるりとこれらの家々、部落を囲む城壁の根跡が残され、(写8)その入口も一門の根跡が残されている。これはこのカイバー峠をこえて広いインドの沃野に入って来る異民族の通路に当るこの地が、現在でも政府の警察力の及ばない自主的運営のパターン族の地で、道行く人々も鉄砲をはなさないようなこの地では防衛的な建築様式が伝えられ自然に定着して行ったことであろう。

このように見て来ると譬喩品の「三車火宅」に表わされ

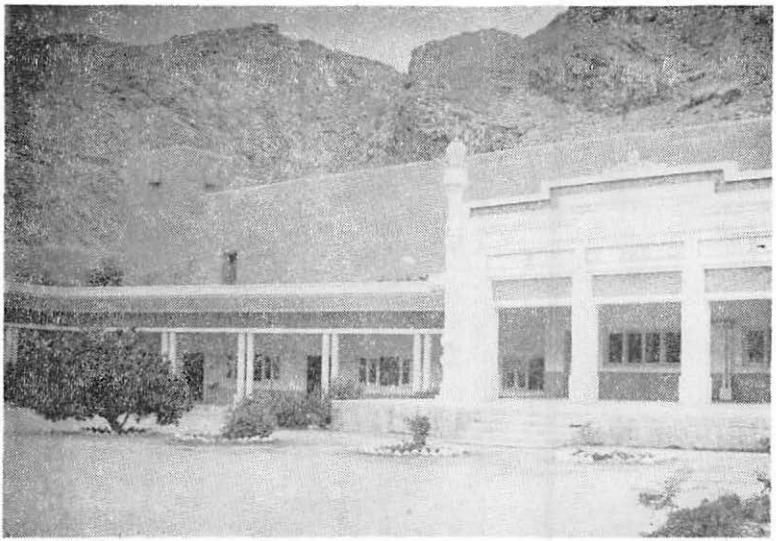
ている世界はインド本土のそれではなく、シルカップやダルマラージカのあるタキシラからアフガニスタンの仏教の栄えた都市ジェララバードにかけての世界ではなかろうか。従って法華経はこの世界か或はこれと遠くない地域で生活していた人々によって作り出されたとも考えられよう。

◈

法華経の中には乾燥的世界の表現が多い。これとガンダーラの風土との関係はないだろうか。今でこそガンダーラ地区は灌概運河が作られ、それから網の目のように四方八方水路が通じ、みどりの沃野に変えられて了っている。例えばタレリーの遺跡の前には大きな運河が流れていて、はじめて行った十七年前の赤茶けた死のガンダーラの印象とは全くかけはなれたものとなっている。特にその時サリバロールで体験した印象が忘れられない。有名な舎利容器が出土したストゥーパの中心がまるで井戸のようにポカンとあいたこの遺跡を見学して、部落から程遠からぬタフティバイの山を見た時のことである。時恰も六七月の猛暑、五十度をこえる焼けつ



6、一門の家（カイバー峠）



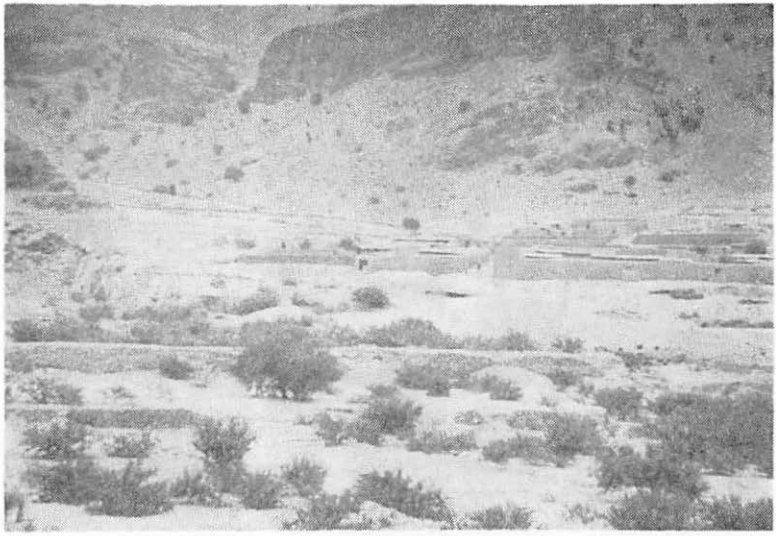
7、一門の家の内部

く太陽の光によって部落のすぐ先の荒地から、カゲロウがあたり一面に白く立ちのぼり、それから先は一面の白い湖のよう。そこにタフティバイの山が映っているではないか、丁度富士五湖の逆さ富士のように。タフティバイだけでなくカイバーの山々やスワット川の岸辺の木が湖をとりまくように見えた。まさに蜃気楼。私はその時直観的に化城譬品の「城を化作する」とはこのような状況からヒントを得たものではなかろうかと感じたものである。

この荒地も今はケシの花咲く美しい畑地と化し、満々と水をたたえて流れる水路には子供がハダカで水牛とたわむれている。灌概運河の発達によって昔と全く別種の世界を作り出し、どんどん環境が変って行くから昔を想像することが最早出来なくなって来た。これは歴史を学ぶものにとってはさみしいことではある。インド洋から遠くはなれモンスーンの影響の少ないガンダーラの地は昔は「化城」の譬が出て来るような乾燥世界であったと私は考えるのである。

◈

次に法華経が自らだけでなく他を救うことによって仏身を成就するという大乗仏教としての特色を鮮明に打ち出して来るのが「捨身」の問題である。序品に「施を行ずるに金銀珊瑚真珠摩尼……奴婢車乗」を布施するだけではなく、「身肉手足及び妻子を施して無上道を求め」「頭目身体を欣楽施与して……」という捨身行が釈尊に生れ変った因行とし、我々もこれにならって悟りへの因とすることが説かれている。これらの行は提婆品や薬王品観音経陀羅尼品にも多く説かれているから、法華経の成立にはこのような慈悲行捨身行の考え方が前提となっていることがわかる。否そのような思想としての考え方だけでなく、「釈尊が前世にこのような捨身行をなされた所」に現実に塔が建てられ聖地信仰としての巡礼等が行われていたのではなかろうかと推測される。即ちインド本土に於ては釈尊自身の霊跡がある。例えばルンビニで釈尊の誕生を祝い、ブタガヤで成道をサルナートで初転法輪を味わいクシナガラで不滅の滅に涙する巡礼の法悦があった。然しながらガンダーラにはそれがない。そこで過去七仏の経行(4)



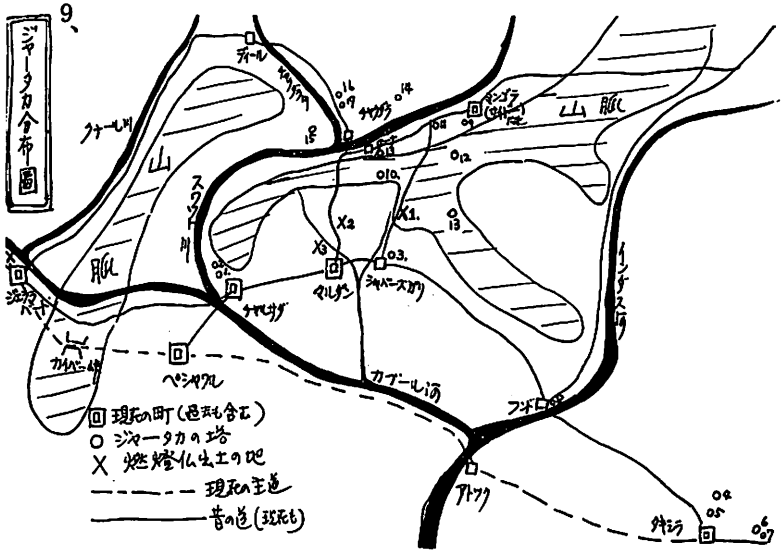
8、部落をとりまく城壁

した所とか釈尊が前世に善行を積んだ所を聖地としてストゥーパを建て或は建てられたストゥーパに因縁話を附加して、その「慈悲捨身行」の追体験の資としたことはわずかな資料からも推量される。(5)

然して一番はっきりした資料は中国からの求経僧達のものであるが、何分時代が下るから法華経成立時の参考にはならないことは勿論だが、消極的な資料としてこれらからそれ以前の法華経時代を類推するしかない。

私はかって大唐西域記・法顕伝・宋雲行記等からジャータカ因縁の塔の分布図を作ったことがある。今これをここに再現して見ることとする。(第9) この分布図から見るとジャータカの遺跡はタキシラからアフガニスタンのジェララバードにわたって分布して

9、ジャータカ分布図



× ジェララバード(玄奘)　×1 シクリ　×2 タフティ・バイ
×3 サリバロール　○1 ラージャ 捨眼　○2 化鬼子母　○3 メハサンダ 施妻子・白象　○4 バーラル 施頭　○5 クナーラ 施眼
○6 マンキャラ 捨身施餓虎　○7 捨身救夜叉　○8 フンド マカラ
○9 ブトカラ 忍辱仙　○10 ヒラ山 捨身施羅刹　○11 摩愉僧伽藍
○12 救布施バラモン　○13 ターナその他 尸毘王　○14 スワット川北岸 施五夜叉　○15 チャクダラ川流域 孔雀王　○16 チャクダラ川 化蘇摩
○17 チャクダラ川 薩哀殺地

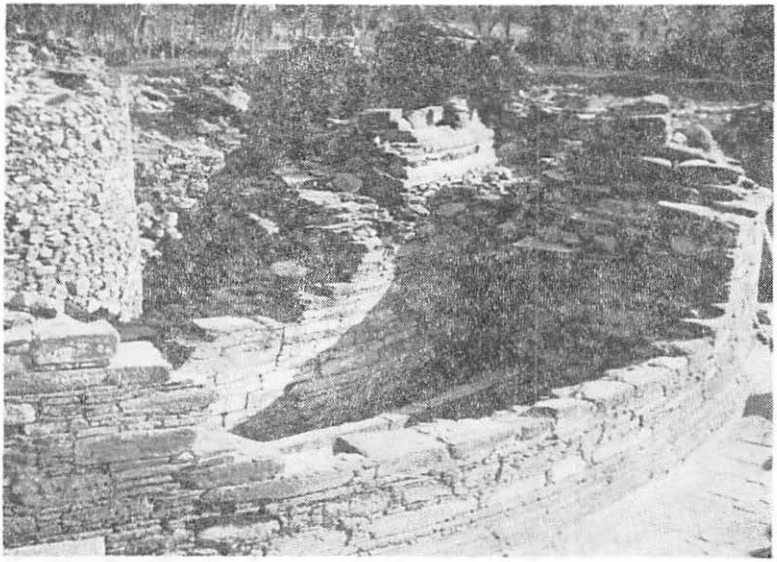
いることがわかる。（○はジャータカの塔　×は燃灯仏）

まずガンダーラ地区では捨眼のストゥーパ(1)がチャルサダの西北に。（この近くに「化鬼子母」の塔(2)がある）又メハサンダやその近くの町チャナカデリーに布施太子の「施妻子・施白象」(3)の塔の跡が現存する。

タキシラにはバーラルの「施頭の塔」(4)が、又シルカップ南方にはジャータカではないがこれと似た話、アソカ王の太子クナーラが目を捨てたという塔(5)がクナーラの大塔の源となっている。又タキシラ東方のマンキャラの大塔(6)は「捨身餓虎」の伝説をもち、この近くに「捨身救悪夜叉」(7)の因縁の地があったとある。

タキシラからガンダーラへとインダスの本流を渡った西岸の町フンドには釈尊の前身の菩薩がマカラとなって人々に自らを食べさせ救ったという塔(8)があったと宋雲行記に記されている。

このフンドから北上してスワットに入ると無数のジャータカの塔がある。まず昔のウドヤーナの首都ミンゴラ近くのブトカラ(9)に巨大な仏塔遺跡のあることが発見された。玄奘のいう忍辱仙の物語の故地とオーレル・スタインは比定している。たしかに今から七八百年位前までチベットから巡礼の聖地としてここに団参する習慣があったというから、よほどの聖所であったことであろう。又半羯のために羅刹に身命を捨てた有名な物語の醯羅山が現在のイラーム山(10)に、正法を聞く為自らの骨をくだいて筆となし皮をはいで紙となし流れる血を墨となした摩愉僧伽藍(11)をゴクダラの遺跡に、又非常にポピューラな物語たる、鷹にとらえられたハトの為に自らの肉をけずって与えた尸毘王本生の塔(13)はダーナ（布施）からターナの遺跡に夫々スタインは比定している。この物語は余りにも有名な為相当数の塔があったらしくガンダーラとブネールをへだてる山脈の山中にも塔があったと記されている。又バラモンに布施をこわれたけれど布施するものは何もない、そこで自らをしばらせて敵将の恩賞にあずからしめたという物語の塔(12)が散在



10、増巾の塔（ブトカラ）

する。

更にスワット川の対岸には飢えた虎に自らの肉体を刺して血を出し又肉を食べさせた菩薩の塔(14)、又チャクダラからディールにそしてチトラルに至る道に沿って孔雀王、蘇摩薩埵殺地の塔(15)・(16)・(17)があったとされる。

一般にスワットの仏教はガンダーラのそれよりおそいと考えられているが、最近の研究では案外古いことが分った。即ちアレキサンダー大王のインド侵入の道がインドと中央アジヤを結ぶ一番古い道だと分ったから。即ちカイバー峠の道は比較的新しく、アフガニスタンのジェララバードからインドに入るにはクナール川沿いに北上し、ディール辺でチャクダラ川を下ってチャクダラでスワット本流に至りターナやビルコットからガンダーラに入る道が主な道であった。特にビルコットからマルダン地区への道沿いにグンバット塔・アムクダラ塔・サンガオ・タレリー・シクリ・ジャマルガリー・タフティバイ等の遺跡が連らなっていることから、この道が如何に重要な通商路であったかが分ろ

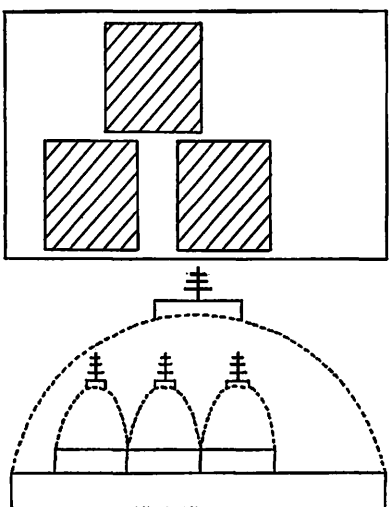
う。特にブトカラの塔が(写10)何回も増巾されているがその中心塔は前一世紀にさかのぼり、スワットパタン村出土の舎利壺銘文もコーノーにより一世紀中葉（静谷目録一七八一）とされたり、又タレリーの主塔が「塔中塔」(写11)として昔の前二世紀の塔をそのままに埋めて増大されていることからしてこの道が非常に古く且つこの道沿いに仏教が古くからあったことが推測される。

且つ又これらの塔の中にジャータカの塔のあったことはマルダン地区で燃灯仏のインスクリプション(5)が出土していることから跡付けられ又西紀三九九年に当る日附をもつ鬼子母神への願文をもつハリティ像(6)がチャルサダ北方八マイルの所謂玄奘のいう「化鬼子母」の遺跡で発見されているから、七世紀という相当時代の下った玄奘の記録も、案外法華経成立時を推定する資料となるのではないかと思って敢て採用した次第。

かくして大乗仏教興起の核となる「利他」の精神のシンボルたるジャータカの物語の塔がタキシラからジェララバードの範囲に分布していた可能性を思う。そして私はこの範囲が前述の「一門」の構造の分布状況と一致する所に非常に興味をいだくものである。

◈

更にこのジャータカのなかで一番大切な燃灯仏の物語—過去七仏中の最後のこの仏に、釈尊の前身たる老婆が泥道



11、塔中塔　タレリー

に自らの髪をしき或は童子となって花を供養する。その善行によって釈尊として生れ「仏身」を成就したという話―。この燃灯仏については玄奘はジェララバードにその聖所×があったことを祥しくのべていることは余りにも有名なことである。

私は度々のパキスタンの博物館めぐりでパキスタンの博物館所蔵の全作品を見ることが出来た。然しそれらの所蔵品には一つの法則性があることに気付いた。それはガンダーラ製ということである。即ち出所のはっきりしたものがラホール博物館に二つある、この一つが有名なシクリ・ストゥーパのレリーフ（×1）であり、もう一つも同じくシクリ出土のものである。更にペシャワル博物館にはサリバロール（×3）出土のものが二つ、タフティバイ（×2）出土のものが二つある。これらはすべてマルダン地区の出土である。更に出所不明のものがラホール博に七つ、ペシャワルに至っては無数にある。然しこれらの石は皆黒色片岩であってほとんど出所の分った像と全く同じガンダーラの石であって他のものは今の所見つかっていない。又面白いことにタキシラには燃灯仏は見つかっていない。これはタキシラの仏教がBC二世紀の非常に早い時期と、三・四世紀以後ストッコ時代の新しい時代の仏教が栄えて、丁度大乗仏教の興隆期にはこのタキシラは仏教のブランク状態であったので燃灯仏が発見されないのは当然と言われようが。

私は前述の如くジャータカの分布図（これも法顕以後の資料からの推定だが）と「三車火宅」の一門構造の範囲と大体一致し、その範囲内のほぼ中心のマルダン地区に沢山の燃灯仏やそのインスクリプションが出土していることは注目すべきことだと思う。従ってこの燃灯仏の出土している近く、五十歩退ってもこの「一門」の構造の範囲内に法華経が成立したと考えてよいのではなかろうかと思う。

この重要な鍵をにぎるものが「仏塔」であると考える。私はこの目的でパキスタンからアフガニスタンのほぼ全部

の塔を巡礼して来たがこれらはこの研究にとって大きなヒントを与えるものであると思うが、この検討は次号にゆずりたい。

〔註〕

(1) 五分律第十五大正二二―一〇一中↓一〇二上

(2) マーシャルの著タキシラ

(3) 南門もあったが、もともと城壁はクナーラの寺でくぎられ、それ以南は別の地域として、その部分の為の門が南門であった。

(4) ジャウリアン出土小塔基銘文 "Kaśava tathagato" 迦葉仏（静谷目録一七四四）

(5) ノーシェラ出土台座銘文（Dhivakara）燃灯仏（コーノー、カロシティインスクリプション）

(6) チャルサダ北方八マイルの Skāra Dheri の遺跡で発見

「彼女が十番目の（私の子を）天上につれて行って下さるように、願わくは（生き残った）子供達が守護されますように」（静谷一七七九）

参考文献

大乗仏典　法華経1、2、

仏像の起源（高田修氏）

平川氏　初期大乗仏教の研究

静谷氏　インド仏教碑銘目録

タキシラとヘレニズム（ラホール博物館　ダル博士）

マーシャル・タキシラ

京大隊　タレリー

フーシェ　ガンダーラ・アート

特にラホール博物館のダル博士、ペシャワル博物館のシャライ博士のアドバイスにおう所大きい。